

## 「川崎市の人口（独自集計編①）」を刊行しました

総務省から公表された平成 27 年国勢調査（平成 27 年 10 月 1 日現在）結果のうち、①人口等基本集計、②就業状態等基本集計、③移動人口の男女・年齢等集計、移動人口の就業状態等集計について、本市独自に地域や項目を細分化して集計した結果等をまとめた「川崎市の人口（独自集計編①）」を刊行しました。

なお、この内容につきましては、本日川崎市ホームページに公表します。

- 人口が最も増加した町丁は川崎区港町（冊子 1 ページ）
- 平均年齢が最も若くなった町丁は多摩区中野島（冊子 6 ページ）
- 「51 階以上」に住む世帯がいるのは中原区のみ（冊子 15 ページ）
- 子供のいる夫婦は「共働き世帯」が過半数（冊子 57 ページ）
- 外国人就業者の「専門的・技術的職業従事者」の割合は中原区が最も高い（冊子 62 ページ）



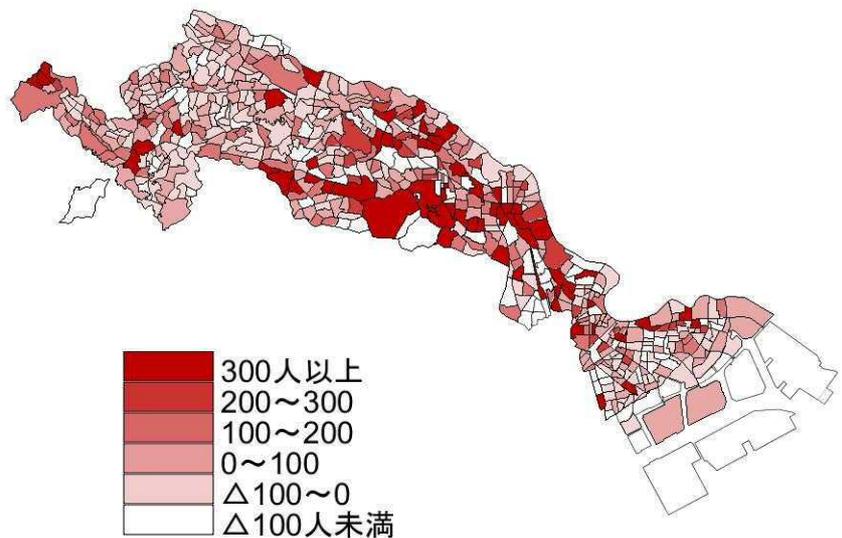
### 人口が最も増加した町丁は川崎区港町

前回調査（平成 22 年）からの人口の増減数を町丁別にみると、最も増加したのが川崎区港町で 3,166 人増となっており、次いで中原区小杉 3 丁目（1,982 人増）、川崎区小田栄 2 丁目（1,764 人増）、中原区新丸子東 3 丁目（1,558 人増）、中原区中丸子（1,533 人増）と続いています。また、上位 10 町丁のうち、宮前区が 4 町丁、中原区が 3 町丁を占める結果となっています。人口の増減があった町丁の数は、人口が増加した町丁が 345 町丁、減少が 253 町丁、増減なしが 20 町丁となっています。（※人口総数が 0 及び平成 22 年 10 月 1 日以降に住居表示が実施された町丁は増減の把握ができないため除きます。）

表 1 人口増減数 上位 10 町丁  
 <<増加>>

順位	区	町丁	増加数
1	川崎区	港町	3 166
2	中原区	小杉町3丁目	1 982
3	川崎区	小田栄2丁目	1 764
4	中原区	新丸子東3丁目	1 558
5	中原区	中丸子	1 533
6	高津区	二子1丁目	1 225
7	宮前区	犬蔵3丁目	1 220
8	宮前区	犬蔵2丁目	1 186
9	宮前区	鷺沼4丁目	1 069
10	宮前区	馬絹	979

図 1 人口増減数



<<減少>>

順位	区	町丁	減少数
1	川崎区	大師河原2丁目	△ 521
2	多摩区	中野島5丁目	△ 447
3	多摩区	東生田1丁目	△ 385
4	高津区	溝口3丁目	△ 345
5	幸区	河原町	△ 340
6	宮前区	南平台	△ 318
7	中原区	井田中/町	△ 311
8	中原区	小杉町2丁目	△ 284
9	川崎区	藤崎4丁目	△ 257
10	宮前区	東有馬4丁目	△ 256

## 平均年齢が最も若くなった町丁は多摩区中野島

川崎市の平均年齢は42.8歳ですが、町丁別に平均年齢を前回調査と比較すると、最も平均年齢が上昇した町丁は宮前区水沢2丁目の9.0歳となりました。上位10町丁は宮前区と麻生区が9町丁を占める結果になっています。

一方、最も低下したのは多摩区中野島の10.8歳となりました。次いで高津区溝口1丁目(9.7歳低下)、川崎区堤根(7.8歳低下)などとなっています。

(表2、図2)

図2 平均年齢の上昇・低下

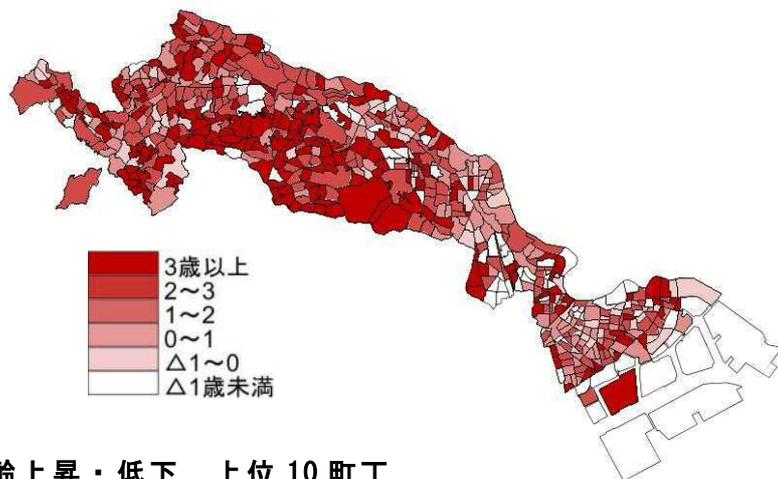


表2 平均年齢上昇・低下 上位10町丁

《上昇》					《低下》				
順位	区	町丁	平均年齢(歳)	前回調査との差(歳)	順位	区	町丁	平均年齢(歳)	前回調査との差(歳)
1	宮前区	水沢2丁目	45.8	9.0	1	多摩区	中野島	46.5	△ 10.8
2	麻生区	白山1丁目	57.1	6.8	2	高津区	溝口1丁目	40.6	△ 9.7
3	宮前区	潮見台	43.6	6.4	3	川崎区	堤根	43.7	△ 7.8
4	麻生区	南黒川	44.5	5.9	4	高津区	久地	34.7	△ 7.4
5	宮前区	平2丁目	50.9	5.5	5	川崎区	塩浜4丁目	42.0	△ 6.3
6	幸区	矢上	45.2	5.2	6	幸区	都町	46.1	△ 6.1
7	麻生区	虹ヶ丘1丁目	50.0	4.9	7	川崎区	港町	34.1	△ 5.8
8	麻生区	細山2丁目	43.5	4.9	8	中原区	新城2丁目	39.9	△ 5.1
9	宮前区	宮崎4丁目	37.6	4.8	9	中原区	小杉町3丁目	38.7	△ 4.4
10	麻生区	万福寺1丁目	41.5	4.7	10	幸区	遠藤町	39.2	△ 3.7

## 51階以上に住む世帯がいるのは中原区のみ

区ごとに、「共同住宅」に住む一般世帯を、世帯の住む階数別にみると、「1、2階」の割合は多摩区が最も高く、61.5% (46,921世帯) となっており、「3~5階」は宮前区が最も高く44.0% (27,935世帯) となっています。一方、「51階以上」は中原区のみとなっており、0.1% (84世帯) となっています。(表3)

表3 共同住宅の、世帯の住んでいる階数別世帯数

全市、区	総数	1,2階	3~5	6~10	11~20	21~30	31~40	41~50	51階以上
実数									
全市	485 429	241 475	174 685	50 686	14 094	2 552	1 343	510	84
川崎区	75 785	33 122	25 190	13 023	4 143	307	-	-	-
幸区	54 633	23 007	17 407	8 748	4 233	886	342	10	-
中原区	93 842	46 047	34 488	8 250	2 396	1 119	958	500	84
高津区	80 583	40 130	30 255	8 232	1 719	204	43	-	-
宮前区	63 532	31 163	27 935	4 285	149	-	-	-	-
多摩区	76 274	46 921	25 115	3 474	728	36	-	-	-
麻生区	40 780	21 085	14 295	4 674	726	-	-	-	-
割合 (%)									
全市	100.0	49.7	36.0	10.4	2.9	0.5	0.3	0.1	0.0
川崎区	100.0	43.7	33.2	17.2	5.5	0.4	-	-	-
幸区	100.0	42.1	31.9	16.0	7.7	1.6	0.6	0.0	-
中原区	100.0	49.1	36.8	8.8	2.6	1.2	1.0	0.5	0.1
高津区	100.0	49.8	37.5	10.2	2.1	0.3	0.1	-	-
宮前区	100.0	49.1	44.0	6.7	0.2	-	-	-	-
多摩区	100.0	61.5	32.9	4.6	1.0	0.0	-	-	-
麻生区	100.0	51.7	35.1	11.5	1.8	-	-	-	-

## 子供のいる夫婦世帯は「共働き世帯」が過半数

一般世帯のうち、子供のいる夫婦世帯（183,077世帯）の就業状態をみると、「夫・妻ともに就業」の世帯（以下「『共働き』世帯」という。）は87,225世帯（52.2%）と最も多く、5割を超えています。また、子供のいる夫婦世帯の就業状態を子供の数別にみると、「共働き」世帯の割合は、「子供が3人以上」が59.1%と最も高く、次いで「子供が2人」が57.3%、「子供が1人」が46.8%となっています。（表4）

表4 子供の数、子供のいる夫婦の一般世帯数

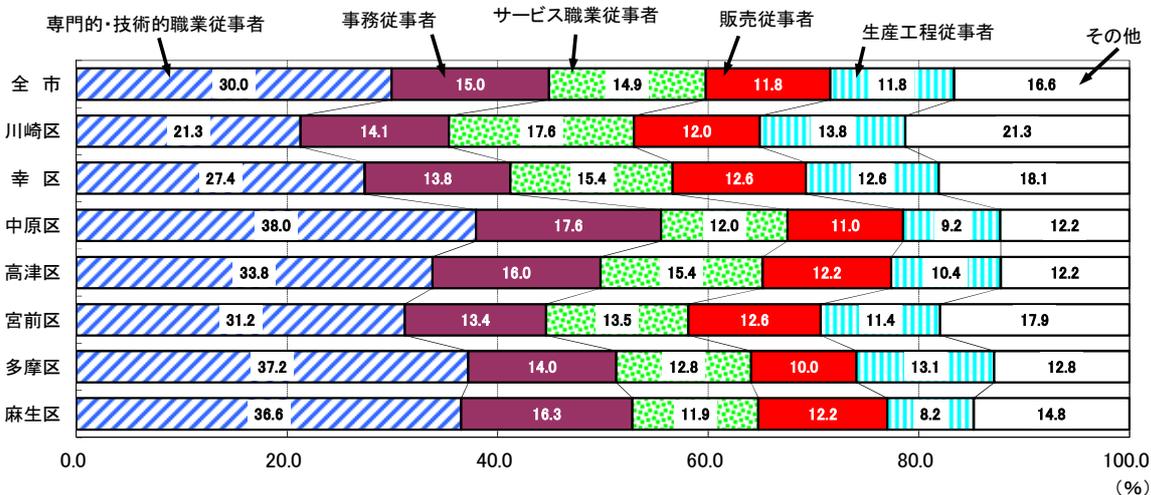
子供の数	総数	夫・妻とも就業(共働き)	夫が就業、妻が非就業	夫が非就業、妻が就業	夫・妻とも非就業
<b>実数</b>					
子供のいる夫婦の世帯数	183 077	87 225	61 015	4 280	14 535
子供が1人	90 547	38 983	29 840	2 900	11 586
子供が2人	76 321	40 108	25 964	1 206	2 698
子供が3人以上	16 209	8 134	5 211	174	251
<b>割合(%)</b>					
子供のいる夫婦の世帯数	100.0	52.2	36.5	2.6	8.7
子供が1人	100.0	46.8	35.8	3.5	13.9
子供が2人	100.0	57.3	37.1	1.7	3.9
子供が3人以上	100.0	59.1	37.8	1.3	1.8

(注) 総数には労働力状態「不詳」を含みます。割合は労働力状態「不詳」を除いて算出しています。

## 外国人就業者の「専門的・技術的職業従事者」の割合は中原区が最も高い

本市に常住する外国人就業者は10,312人、職業大分類別割合を区別にみると、「専門的・技術的職業従事者」は中原区の38.0%が最も高く、次いで多摩区の37.2%となっており、最も低いのは川崎区の21.3%となっています。「事務従事者」は、中原区の17.6%が最も高く、次いで麻生区の16.3%となっており、最も低いのは宮前区の13.4%となっています。「サービス職業従事者」は川崎区の17.6%が最も高く、次いで幸区及び高津区の15.4%となっており、最も低いのは麻生区の11.9%となっています。（図3）

図3 区、職業（大分類）別15歳以上外国人就業者の割合



# 鉄道沿線の町丁と鉄道沿線から離れた町丁の人口属性の違い



( ) は報告書掲載ページ数です。

## ＜鉄道沿線で割合が高い＞

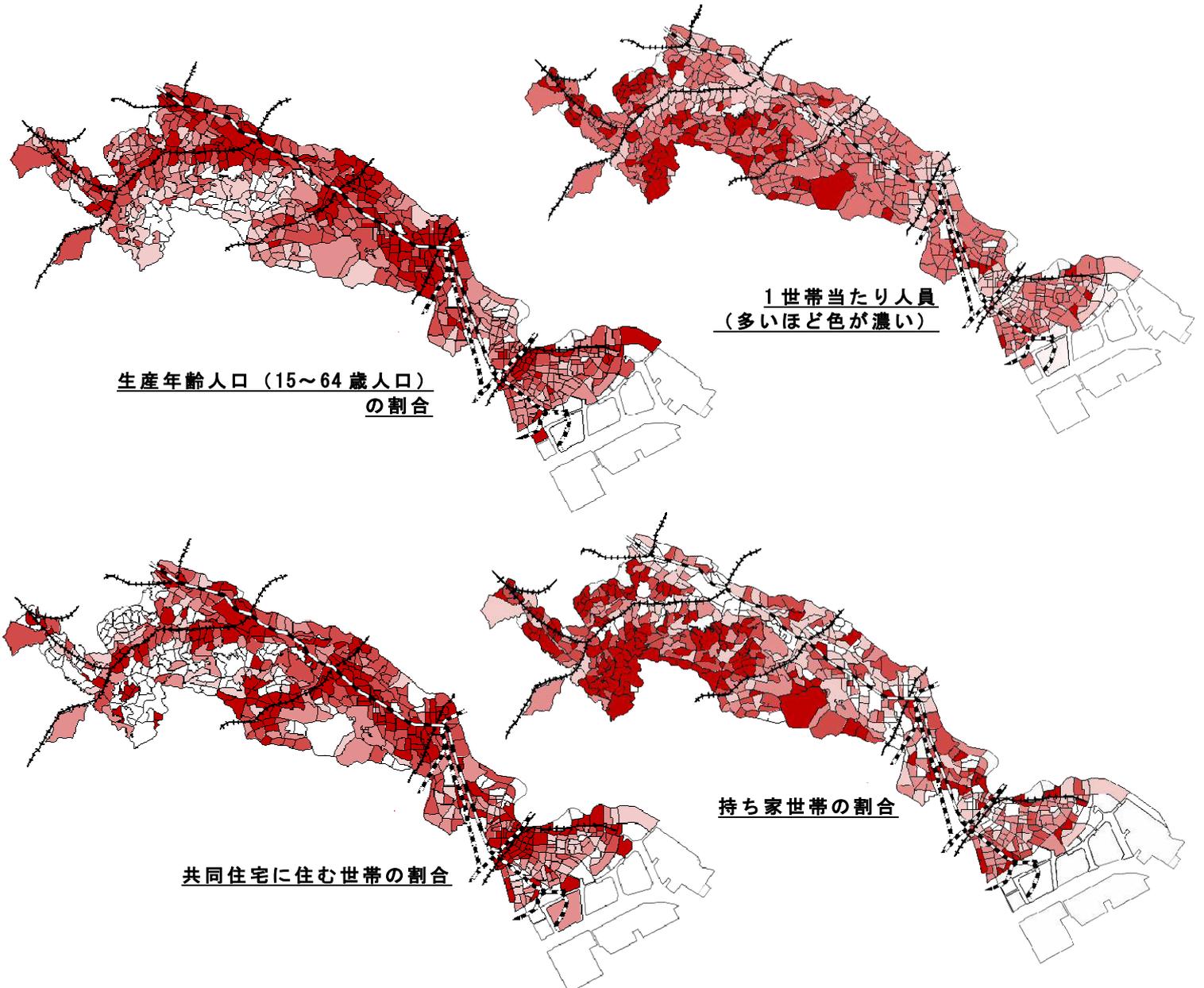
- 生産年齢人口(P.4)
- 1世帯当たり人員の少ない世帯(P.8)
- 借家及び共同住宅の世帯、単独世帯(P.9～14)
- 5年前の常住地が現住所以外(移動人口)(P.20)
- 移動人口のうち5年前の常住地が他県(P.24)
- 居住期間が5年未満の人口(P.38)
- 労働力率(特に女性)(P.42)
- 情報通信業就業者(P.46)
- 専門的・技術的職業従事者、事務従事者(P.52)

## ＜鉄道沿線から離れた地域で割合が高い＞

- 1世帯当たり人員の多い世帯(P.8)
- 持ち家の世帯(P.11)
- 5年前の常住地が現住所の人口(P.20)
- 移動人口のうち5年前の常住地が自区内(P.24)
- 居住期間が20年以上の人口(P.38)



(注) 以下の地図については、スペースの都合により抜粋としています。色が濃いほど割合が高いことを示しています。



移動人口の割合

5年前の常住地が現住所の人口の割合

居住期間が5年未満の人口の割合

移動人口のうち5年前の常住地が自区内の割合

専門的・技術的職業従事者の割合

居住期間が20年以上の人口の割合



## 学区別のランキング（各項目 上段の表：小学校区、下段の表：中学校区）

本市独自で小学校区及び中学校区ごとに集計を行いましたので一部を御紹介します。

子どもが多い学区の上位は、麻生区及び川崎区の地域が多くを占めています。働き盛りの世代が多い学区の上位は多摩区、中原区、高津区のうち、交通の便が良い地域となっています。

また、長く住み続けている住民が多い学区の上位は、麻生区と川崎区の地域が多くなっていますが、子どもが多い学区とは異なっています。

### 《働き盛りの世代が多い》

（15～64歳の生産年齢人口割合が高い）

順位	区	小学校区	割合(%)
1	多摩区	登戸	76.9
2	中原区	木月	75.7
3	高津区	高津	75.3
4	中原区	東住吉	75.3
5	中原区	西丸子	75.2

順位	区	中学校区	割合(%)
1	中原区	中原	75.1
2	多摩区	栞形	74.9
3	中原区	今井	74.0
4	高津区	高津	73.1
5	中原区	住吉	73.1

(P. 16)

### 《新しい住民が多い》

（居住期間5年未満の人口割合が高い）

順位	区	小学校区	割合(%)
1	中原区	東住吉	42.9
2	中原区	今井	42.8
3	麻生区	はるひ野	41.9
4	川崎区	旭町	41.1
5	中原区	住吉	39.8

順位	区	中学校区	割合(%)
1	中原区	今井	42.3
2	麻生区	はるひ野	41.9
3	中原区	中原	37.7
4	川崎区	富士見	37.0
5	中原区	住吉	36.9

(P. 38)

（注）表欄外の（）は報告書掲載ページ数です。割合は「不詳」を除いて算出しています。

### 《子どもが多い》

（0～14歳の年少人口割合が高い）

順位	区	小学校区	割合(%)
1	麻生区	はるひ野	22.9
2	川崎区	東門前	19.4
3	川崎区	渡田	19.1
4	幸区	戸手	17.9
5	中原区	下小田中	17.6

順位	区	中学校区	割合(%)
1	麻生区	はるひ野	22.9
2	川崎区	大師	16.2
3	麻生区	麻生	15.7
4	中原区	日吉	15.6
5	川崎区	臨港	15.6

(P. 16)

### 《シニア世代が多い》

（65歳以上の老年人口割合が高い）

順位	区	小学校区	割合(%)
1	麻生区	虹ヶ丘	39.2
2	麻生区	王禅寺中央	36.6
3	宮前区	白幡台	32.5
4	幸区	御幸	31.5
5	中原区	下河原	29.7

順位	区	中学校区	割合(%)
1	麻生区	王禅寺中央	37.4
2	幸区	御幸	26.9
3	川崎区	桜本	26.6
4	中原区	平間	26.3
5	宮前区	平	26.0

(P. 16)

### 《長く住み続けている住民が多い》

（居住期間20年以上の人口割合が高い）

順位	区	小学校区	割合(%)
1	麻生区	王禅寺中央	43.2
2	川崎区	新町	37.2
3	川崎区	浅田	36.6
4	麻生区	東柿生	36.2
5	麻生区	真福寺	36.1

順位	区	中学校区	割合(%)
1	麻生区	王禅寺中央	40.6
2	川崎区	京町	35.2
3	川崎区	田島	33.6
4	多摩区	南菅	33.2
5	川崎区	桜本	31.9

(P. 38)